

## 教育長定例記者会見 会見録

日時：令和5年1月27日（金）16時00分～

場所：教育委員室

### 発表項目

- ・ 第9回ものづくり日本大賞青少年支援部門における四日市工業高等学校の文部科学大臣賞の受賞について
- ・ 学校防災ボランティア事業で東北を訪問した高校生が成果報告会を行います

### 質疑事項

- ・ 損害賠償額の決定及び和解について
- ・ いなべ市の断水した小学校について
- ・ 令和4年度いじめ問題対策連絡協議会について
- ・ 木本高等学校野球部について

### 発表項目

#### ○ 第9回ものづくり日本大賞青少年支援部門における四日市工業高等学校の文部科学大臣賞の受賞について

四日市工業高等学校が第9回ものづくり日本大賞の青少年支援部門の文部科学大臣賞を受賞したというものです。県立四日市工業高校が、ものづくり日本大賞のものづくりの将来を担う高度な技術・技能分野の青少年支援部門で文部科学大臣賞を受賞いたします。高校の受賞は全国で四日市工業高校だけとなっております。三重県では初めての受賞となります。ものづくり日本大賞は、厚生労働省、経済産業省、国土交通省、文部科学省が連携して主催されているもので、平成17年に第1回が開催され、その後2年に1回、今回は第8回から3年ぶりの開催となります。青少年支援部門の文部科学大臣賞は、生徒を対象としたものづくり人材育成の活動を行う学校のうち、特に優秀な成績を収めた学校に対して授与されるものです。受賞の主な理由として、ものづくり創造専攻科は高校本科の3年間を卒業してから学ぶ2年課程の専攻科で、機械コースと電気コース計20名あるのですけれども、この意味合いとしては県内で工業に関する専門的な学習をとおして、グローバルな視野を持って地域産業界の担い手のリーダーとなる人材を育成することで平成30年度に開設いたしましたことです。三重大学さんを始め大学教員による講義とか企業技術者による指導、地元企業での長期研修、海外研修などを実施しております。企業や団体と連携した協働パートナーズというのがこの大きな特徴で、石油化学コンビナート、半導体、自動車産業を中心とした地域を支える技術者を地域の109企業7団体が登録いただく協働パートナーズを構成いただいて、育成しております。それで企業の技術者による講義とか、工場見学、インターンシッ

プ、デュアルシステムなどを実施させていただいております。専攻科を修了して就職する、すべての生徒が地元の企業あるいは協働パートナーズの登録企業に就職されていることです。コンテストでの実績で、ものづくりコンテスト全国大会での優勝など多くの大会で活躍していることが評価されて、令和5年2月6日に14時から文部科学省で表彰式がございます。四日市工業高校は全日制7学科と、このものづくり創造専攻科、定時制2学科で、県内で最も大きな工業高校であります。今年度ちょうど創立100周年を迎えるところです。

### ○ 学校防災ボランティア事業で東北を訪問した高校生が成果報告会を行います

学校防災ボランティア事業で東北を訪問した高校生の成果発表会を行うというものです。資料の3ページをご覧くださいますと、1月6日から9日まで、高校生34名が福島県の浪江町と双葉町、宮城県の東松島市、石巻市涌谷町を訪問して学習してきてくれました。1日目、こっちから移動して着いた後、すぐに震災遺構となっている浪江町の請戸小学校を実際に見て、解説も聞きました。東日本大震災の原子力災害伝承館が少し前にできて、そこを視察しつつ、その双葉町にあるのですけれども、2グループに分かれて地元の高校と交流を行い、向こうの高校生からは風評被害が残っていることなどを答えるクイズ形式での発表、新聞部として震災を伝え続けている発表がございました。三重県からも、こちらの災害とか防災学習について発表いたしました。翌日の1月7日は東松島市のあおい地区の災害公営住宅、そこで滞在して高齢者のご自宅に行かせていただいて、清掃ボランティアに行ったり、話を聞かせていただいたり、講話として、災害医療と心のケアであったり、避難所の設置と運営協力、あるいは地区の会長の方の直接の話も聞かせていただきました。3日目は、石巻市の門脇、これも震災遺構ですけれども、門脇小学校を視察いたしました。そのあと涌谷高校の生徒と防災行動学習をして、両県の高校生が8グループに分かれてグループワークなども実施いたしました。そのあと、石巻市の大川小学校で語り部の佐藤敏郎さんの話を聞かせていただいて、実際の裏山も登らせていただきました。行政の立場からのお話とか災害ボランティア活動とかの講話も聞かせていただいたところです。そうした活動につきまして、参加した生徒の主な感想としては、地震や津波の恐ろしさを肌で感じたとか、被災したという後ろ向きの意見ではなく復興しようという前向きな姿勢であったとか、現地を見て、災害の備えの意識が変わって今回の経験を伝えたい、あるいは自分や周りの人が命を守れるよう生かしていきたい、人と人との繋がりが大切だと思った、あともう少し現地の高校生との交流する時間が欲しかったということがございます。そうしたことについて、現地学習会に参加した生徒が、訪問して学んだことで今後に生かしたいことなどを現地でお世話になった皆さんや宮城県の高中生、三重県災害時学校支援チーム隊員など県内の防災関係者の方に、オンラインで発表する成果発表会を2月5日に13時から16時までみえ市民活動ボランティアセンターで行います。会場ゲストとしては、東北大学の齋藤先生がお見えです。内容としては参加した生徒34名が6班に分かれて現地で学んだ成果を発表いたします。現地学習会でお世話になった方々から、オンラインを通じてコメントをいただきながら、大学生

引率ボランティアの方もこちらから参加しましたので、その人の発表と、最後に齋藤先生からの講評と防災講話をいただきます。オンラインの参加者は東松島市のあおい地区の皆さんとか、宮城県の涌谷高校の皆さん、発表する学校の関係者とか三重県災害時の海外学校支援チームの隊員とかで、この発表はどなたでも視聴していただけます。参加生徒は、この発表会のほか、各自の学校でも成果を伝えたり、明日1月28日に川越町で開催されるシンポジウムで、パネル展示をしたりしております。あと防災士の資格が取得できるカリキュラムがありまして、34名の参加生徒のうち15名がその試験を受験予定で、また2月12日も勉強会を実施するようにしています。

### 発表項目に関する質疑

#### ○ 第9回ものづくり日本大賞青少年支援部門における四日市工業高等学校の文部科学大臣賞の受賞について

(質) 色々な省庁と一緒に主催しているようなのですが、この四日市工業高校が取った文部科学大臣賞は、この青少年支援部門では最高賞ということですか。

(答) そうということです。

(質) つまり、子どもたちが取る賞としては一番大きかったということによろしいですか。

(答) そうです。

(質) あと、協働パートナーズの中身で、細かい話なのですが、このデュアルシステムってどういうことを意味しているのですか。

(答) インターンシップと言うと、普通、年のある時期に5日とか3日とかという形で行くのですが、デュアルシステムというのは、事業所において実際に1日そこで実際の仕事を教えていただきながら、例えば1週間のうち金曜日はそれをしながら、それを年間通じてカリキュラムの中に授業の一環として入れることと、学校での実習とか座学とかということの両方やること、そういう2つやることで、桑名工業で全国的にもかなり先駆的にさせていただいて、それが中々難しいのですけれども、非常に教育的な効果も高いことがありますので、このものづくり専攻科を中心に平成30年度からさせていただいているところです。

(質) ものづくり創造専攻科ですけれども、実際に地元企業でも長期研修することで、これはそのすぐ下のパートナーズに入っている109企業とかでやる意味合いですか。それともまた別の企業なのですか。

(答) そのパートナーズの企業さんでさせていただきます。

(質) 具体的に何社かお名前を出してもいいようなものは。リストとか付けていただいていますかね。

(答) リストは付けてないです。

(答 高校教育課) 半導体系ですと、ユナイテッド・セミコンダクター・ジャパンさんがあります。

- (質) あといくつかお示しをしてもらえますか。
- (答 高校教育課) 例えば、富士電機株式会社さん。
- (質) そういう大手とかも入っていてということですか。
- (答 高校教育課) あとは、半導体の製造装置メーカーのジャパンマテリアル株式会社とかそういったところもありますので。
- (答) あと少し質問の観点とは違うのですが、最近コロナで海外での研修というのはいきてないのですが、平成30年度は伊藤製作所さんのご協力を得て、フィリピンに行っています。令和元年度にはベトナムヘエバ工業さんと日本トランスシティさんのご協力で行かせていただいております。令和2年度以降はコロナの状況で直接はできてないですけど、あとパートナーズの方は、年に1回で、それは随時やっていますのですが、授業に社の人に来ていただいていることと、四日市工業のものづくり専攻科の教育内容とか、こういう人づくりをしていこうということを説明して、それについて実際に今おっしゃったような、例えば半導体とかこういうふうに変わっているとかいうことのご意見をいただいて、このカリキュラムをより良くしていくということも、ものづくり創造専攻科の大きな特徴としてさせていただいております。当初に比べると、このパートナーズに入らせていただく企業さんはかなり増えている状況です。
- (質) ちょっと細かい数字的なことになってしまうのですが、専攻科を終了して就職するすべての人が、地元企業とか協働パートナーズにということなのですが、全体で、延べで言いますとどれくらいの生徒さんになるのか。
- (答) 一部はこの専攻科を終了した後、大学3年生の編入ができますので、それで大学に進学される人も何人かはおります。数字はどうですか。
- (答 高校教育課) 延べ人数ですか。今ぱっとお伝えすることはできないのですが、大体この春卒業した方でいきますと、17名のうち、進学したのが1名で残りが就職になります。
- (質) それは16人の方は地元の企業にということですか。
- (答 高校教育課) はい。
- (質) それを受けて教育長にお伺いしたいのですが、この仕組みというのはいかに県内定住であったり、あるいは若者の人口流出を少なくするという意味合いもあるのかなと思うのですが、そういう観点から考えると、この事業、賞を受けているわけですが、改めて評価というのは。
- (答) 三重県はものづくりの盛んな地域で、そこで活躍できる人材育成ということで、平成30年度からものづくり創造専攻科で、事業所さんの協力を得て、独自の取組をさせていただいて、今回、文部科学大臣表彰を受けさせていただくということで、すごく高く評価いただいたのかなと思って、ありがたく思いますし、ちょうど四日市工業高校は今年100周年になりますので、その節目の年でもあります。ですので、改めてまた産業界いろんな動向等あると思いますので、協働パートナーズとのまさに協働を大切にして、

これから地域の産業をリードできる人材育成を引き続き頑張っ  
て取り組んでいきたいと思っています。特にものづくり創造専攻科は  
もちろん大学ではないのですけれども、三重県内の高等教育機関が、  
特に理系というか、その部分が、大学としては三重大学ということ  
になります。あと高専があるので、それ以外の工業高校なり、普通  
科高校を出た生徒が進学する、もう一つ勉強してというところが受  
け皿としてない状況がありましたので、そういう意味もあって平成30  
年度から開設させていただきました。

(質) ひとつそれに絡めてちょっと賞から離れてしまうのですけど、  
昨日も県立大学をどうする話があったので今思い出したのですけど、  
四日市市さんが特に理工系学部の大学を駅前に来てもらいたい動  
きもあるようではあるのですが、今後県内の工業高校で似たよう  
な、この高校終わった後のこの2年間方式みたいなことを考  
えている学校とか県内では何かあったりするのでしょうか。

(答) 今はこの四日市工業というのをさせていただくことで、  
それ以外の工業高校で、同様のということを現時点で教育委員  
会として具体的に何か考えている、進めているという状況は  
ございません。専攻科はいろんな、例えば水産高校とかも5年、  
3年行って2年の専攻科があったり、桑名高校も看護師になる  
ための専攻科があって、衛生看護科に3年行って、2年専攻科  
に行けば、5年間で看護師の免許を受けられる、実習も含め  
て資格が取れる、水産高校も三級海技士とかの資格が取れるこ  
とがあって、工業高校の専攻科は全国にもいくつかあるのです  
けれども、そんなにも多くない状況がありますので、まず工業  
高校、この四日市工業の専攻科をしっかりと組みたいと思  
っております。

#### ○ 学校防災ボランティア事業で東北を訪問した高校生が成果報告会を行いますについて

(質) これは毎年恒例で、東日本大震災以降やってらっしゃるもの  
なのですか。

(答) そうです。始めた当初は中学生と高校生が夏休みの時期を  
利用して、向こうに行かせていただいております。昨年度はコ  
ロナがありまして、この1月に紀南高校の生徒、災害にかなり  
熱心に取り組んでいる方に代表して行っていただきました。令  
和2年度は実施できていない状況です。令和元年度までは中  
学生と高校生が現地に行かせていただいて、夏の期間に交流  
させていただきました。

(質) これは、2011年が震災で、その翌年から実施されている  
のですか。

(答 教育総務課) 平成24年度から、24年度以降、名前は  
変わっておりますが、交流事業を実施しています。

(質) 一昨年だけは紀南高校で少ない人数で行ったけれども、  
コロナ禍で。あとは、行きたい高校生を全県から募集して  
という感じですか。

(答) 令和2年度が中止で、令和3年度が紀南高校で、今年  
度は広く公立も私立も含めて、高校生ということなのです  
けれども、募集させていただいて、応募のあった方全員が  
行っていただきました。

(質) 主な訪問先と内容が、12 くらいいろんなプログラムがあると思うのですが、これは 34 名全員がこの 12 個のプログラムを全て受けるということでしょうか。

(答) そうです。

(質) 場所の選定なのですけど、浪江とか双葉とか東松島市とかいろんなところがあるかと思うのですが、このプログラムを組む上で重視したこととかはありますか、なんでこの場所なのかとか。

(答 教育総務課) 福島県は通常の災害プラス原子力災害を受けていまして、そういうところに行って学んでいただくことが、また宮城県とは違ったご経験や復興の形を取られていますので、そういうところに行かせていただいて、宮城県につきましては、東松島市のおおい地区とは事業開始以来、長く交流させていただいていまして、そちらの方にお邪魔したのですけれども、大川小学校につきましては、多くの児童の方が亡くなっている場所で、毎年度行っているのですけれども、やはり生徒たちの一番印象深いところですので、今回行かせていただいています。

(答) 少し補足させていただきますと、当初は直接体験した同世代の高校生や中学生とかの経験などが中心だったのですけれども、10 年経つと、直接の経験というのものなかなか、小さい頃のことになりますので難しいということで、一方で、公営住宅でまだお住まいの方とか、当時の医療がどうだったかとか、避難所の運営がどうだったかということで行政の関わりがどうだったか、そういった観点も加えて今回させていただいて。高校生は、もし大きな地震とかがあった場合に、自らの命を守ることと、できれば支援者、助ける側にもなれるようにということも最近やっていますので、そういうことにも役立つ観点で、場所を選定させていただきました。

## その他の項目に関する質疑

### ○ 損害賠償額の決定及び和解について

(質) 今日の教育委員会定例会の内容で、損害賠償の資料も入っていましたか。

(答) 2月1日でしたか、全体で議会の部分についての議案になりますので、そこになると思うのですけれど。

(質) 議案に入ってくるってことですね。概要だけでも確認できますか。

(答) 資料提供を一度したことがあるのですけれど、昴学園高校で油が漏れました。寮がありますので、その寮でのお風呂とかの油なのですけれど、隣地にしみ込んだということがあって、それに係る賠償金ということになります。

(質) 裁判を起こされてということではないのですか。

(答) そういうことではないです。

(質) お詫びの、賠償の和解ということですね。

### ○ いなべ市の断水した小学校について

(質) 雪の影響でさっき対策本部があって、いなべで一校、もう水道が使えなくなってきちゃっている学校がでちゃったってことだったのですが、この学校は、今日金曜日ですけど、月曜日から授業が出来そうなのかとか、そのへんの見通しってあるのでしょうか。

(答 教育総務課) そのあたりについては、現在、復旧など行っているところでございまして、まだ未定と聞いています。

(質) まだわからないですか。ちょっと修繕できないと休校の可能性も出てくるということですかね。

(答 教育総務課) そのあたりも含めてまだ現時点では不明ということ。

(質) 被害の他の広がりは今のところ入ってない、1校だけということで大丈夫ですかね。

(答 教育総務課) 情報が入っているのが1校ですね。

(質) 今の雪の関係で、丹生川小学校が1時に生徒さんを帰したということなのですが、給食とかは問題なく午前中の授業とか。

(答 教育総務課) 給食の方は、給食センターの方から運んでくるということで、給食はとったうえで下校したということです。午前中につきましては、水が少し出ているタンク等がございますので、水が出ている状況でしたので、午前中はよかったですけど、水が出てこないということで、午後からの下校を決められたと聞いています。

#### ○ 令和4年度いじめ問題対策連絡協議会について

(質) 1月31日にいじめ問題対策連絡協議会が開催されるかと思うのですが、この内容とねらいを教えてくださいませんか。

(答) 毎年、1回なり2回開催させていただいてまして、それで、いじめ、三重県の内いじめの件数であったり、状況を教育委員会の事務局から報告させていただいて、参加していただく委員の方は、いろんな立場で関わっていただく方ですので、今検討中だと思うのですが、議論いただくテーマを設けて、ご意見をいただいて、これからのいじめ対策に生かしていったり、あるいは、それぞれの参加されている、それぞれの委員の立場の中で、推進していただいたりすることで、そういう連絡調整と協議していただくものになります。

#### ○ 木本高等学校野球部について

(質) 選抜高校野球大会のことで、21世紀枠の候補になっていた木本高校が今回残念ながら選ばれませんでしたけど、教育長からどういうことを期待されたかとか、今回の結果をどう受け止めているか教えてくださいませんか。

(答) 結果として、私も発表を直接聞かせていただきましたけど、結果として選ばれなかったことはやっぱり残念だなという思いと、頑張ってきた木本の生徒、あるいは関係者の皆様が残念な思いをされていると思います。木本高校の今回のチームはご案内のとおり選手が13名、マネージャー2名、あわせて15名と、いずれも地元の生徒さんという

ことです。東紀州地域は以前から野球が非常に盛んで高校でも非常に全国的に有名な強豪校が、例えば熊野に行ってキャンプをされたりということがあります。選手が 13 名でも地域の方の応援がすごくあって、練習にも非常に協力してくれたり、もちろん選手は 13 人の中でなかなか練習環境とか練習相手にも恵まれない中、非常に工夫して取り組んでほんとに素晴らしいことであるし、21 世紀枠の候補に選ばれたことを本当に誇りに私も思いますし、これからの、あの地域の生徒は減りつつあるのですが、団体競技なかなか難しいと言われますけど、引き続き頑張りたいなと思っています。私も応援していきたいなと思っています。

以上、16時29分終了